平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名	さいたま市立針ヶ谷小学校

校 長 名：三村　昇

所 在 地：埼玉県さいたま市浦和区
領家７－２－１

電話番号：　048-831-9040

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	算数

≪研究主題≫

人とのかかわりを通して，思考力・表現力を育てる算数学習の在り方

【研究の要点】

新学習指導要領の趣旨を受けて，根拠を明らかにし筋道を立てて考えることや算数的な表現を用いて互いに自分の考えを表現し合うことなどの指導を充実させる研究を進めた。

授業づくりでは，①学習活動のねらいを明確にすること，②教師の発問を具体化すること，③「人とのかかわり」を学習過程に位置付けることを3つの柱にして研究を進めた。

研究を進めていく中で，児童の思考力や表現力を育てるには，問題解決型の授業が不可欠であることを確認した。また，児童は，考える中で表現し，表現して考えるということが分かってきた。児童の考えや表現を十分に生かし，思考力・表現力を育てるためには，教師がねらいをつかみ，ねらいとする児童の姿を具体的にイメージしておくことが求められた。そして，問題解決的な学習過程における発問計画をもつことによって，どこで，どのように思考力・表現力を育てるのか明確になり，児童の不完全な思考や不十分な考えを補ったり，考え方を身に付けさせたりすることができた。

さらに授業実践を重ねていくと，児童は，人とのかかわりを通して，考えを見つめ直したり，考えを修正したり，新たな学びをつくり出したりできることが分かってきた。

今後も，「人とのかかわり」を通して児童の力を育む授業づくりを進め，複数の思考・表現で確かめ，複数の思考・表現のそれぞれのよさを実感する活動を大切にしていくとともに，複数の思考・表現を同じものと見て統合し学びをつくる活動や発展的に考える活動を課題にして，指導の工夫改善を図りたい。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校の学校教育目標は，「豊かな心をもち，たくましく生きる児童を育成する」である。本校の児童は学習状況調査などからも，基礎的・基本的事項はおおむね身に付けていると考えることができる。一方で，既習事項と関連付けながら問題をじっくりと考えたり，自分の考えを友達に分かりやすく伝えたりすることに課題があった。このような学校課題からも，思考力や表現力を育てる研究を進め，学習活動に生かしていくことが，児童にとって生きる力の育成につながると考えた。

研究主題の中の「人とのかかわり」は，本校が長い間大切にしてきている教育活動推進の理念「ともに伸びよう」に基づいている。また，さいたま市の学校教育ビジョンでは，基本理念を，『学校・家庭・地域・行政が連携・協力して，「知」「徳」「体」「コミュニケーション」のバランスのとれた子どもをはぐくむ』としており，人とのかかわりと合致する。

以上のようなことは，人とのかかわりを通して，思考力・表現力を育てる研究を進めていく上での前提となった。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	3	4	4	3	3	3	0	20
児童数	96	111	133	116	116	110	0	682

教員数　31名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

人とのかかわりを通して，思考力・表現力を育てる算数学習の在り方

(2) 研究主題設定の理由

小学校学習指導要領解説〔算数編〕では，「根拠を明らかにし筋道を立てて体系的に考えることや，言葉や数，式，図，表，グラフなどの相互の関連を理解し，それらを適切に用いて問題を解決したり，自分の考えを分かりやすく説明したり，互いに自分の考えを表現し伝え合ったりすることなどの指導を充実する」としている。このような趣旨を具体化するために，研究主題を「人とのかかわりを通して，思考力・表現力を育てる算数学習の在り方」と設定した。

(3) 取組体制

指導者（指導・助言）

校長・教頭

- 推進委員会（理論・立案・連絡・調整）

〈構成〉校長，教頭，教務主任，研修主任，算数主任，各学年の算数部員等

- 全体会（共通理解・協議・授業研究会）
- ブロック研修（実践的研究）
  - ・低学年ブロック
  - ・中学年ブロック
  - ・高学年ブロック
- パート部会（作業）
  - ・学習指導部
  - ・研究紀要作成部
  - ・環境整備部

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	4	（月）全体会
	5・6	授業研究会（共通理解・指導の工夫）
	7	授業研究会（指導の工夫）
	8	研修全体会（学習理論の検討）
	10･11	授業研究会（仮説の検証）
		先進校視察（金沢市立菊川町小学校）
	12・2	授業研究会（今年度のまとめ）
平成22年度	4	（月）全体会
	5・6	授業研究会（共通理解・授業づくりの視点）
	7	授業研究会（授業づくりの視点）
	8	夏季研修会（研究紀要作成等）
	10	授業研究会（ねらい・発問・活動）
		先進校視察（金沢市立菊川町小学校）
	11	研究発表会（授業研究会・講演）
	12・2	実態調査　研究報告書の作成

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 目指す児童像

低学年：算数的な表現に慣れる段階

「算数的な表現を用いて考えたり，自分の考えを表現したりする子」

中学年：算数的な表現を用いて伝え合う段階

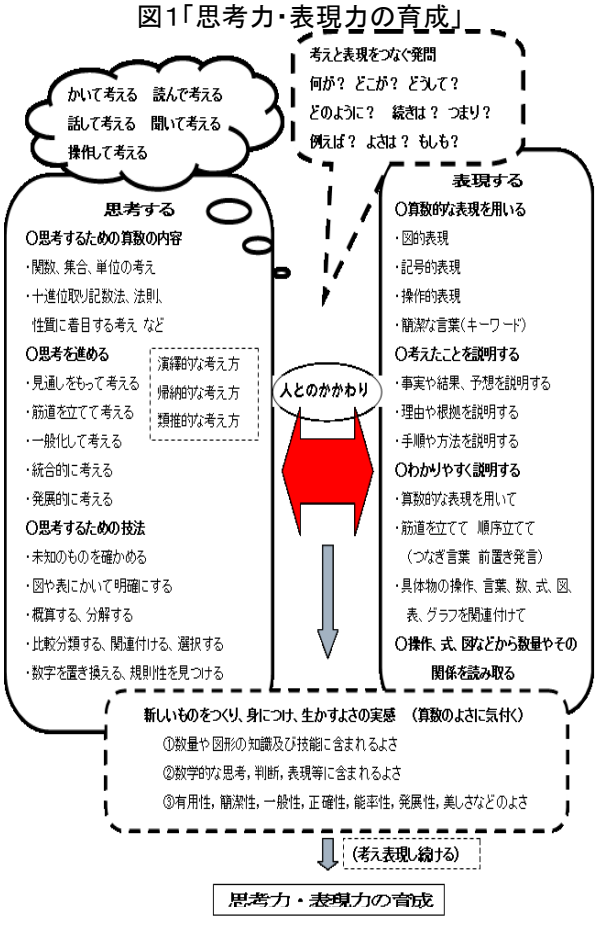
「算数的な表現を用いて，既習事項を基に筋道を立てて説明したり，お互いの考えを比べたりする子」

高学年：算数的な表現のよさを実感できる段階

「算数的な表現を用いて，根拠を明らかにし筋道を立てて分かりやすく説明したり，お互いの考えのよさを実感したりする子」

(2) 授業づくりの構想

図1「思考力・表現力の育成」

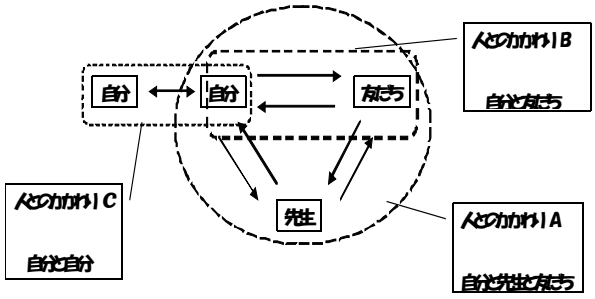


小学校学習指導要領解説（算数編）には，「考える能力と表現する能力とは互いに補完しあう関係にあるといえる」「考えを表現する過程で，自分のよい点に気付いたり，誤りに気付いたりすることがあるし，自分の考えを表現することで，筋道を立てて考えを進めたり，よりよい考えを作ったりできるようになる」とある。

これらのことも踏まえて，本校では図１のように，「人とのかかわり」を通して思考と表現を繰り返し，算数のよさに気付く授業を展開することによって，思考力・表現力を育成するようにした。

「人」とは，図２のように，先生，友達，自分（客観的な自分）を指し，学習のねらいや学習段階，児童の実態などに応じて，効果的なかかわり方を設定する。

図2「人とのかかわりの形態」



(3) 授業づくりの重点

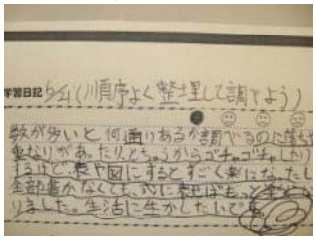
① 教材研究によるねらいの明確化

〔３つのねらい〕

・ねらいとする思考・表現

・ねらいとする学び合いの観点

・ねらいとする感想



人とのかかわりを確かな学びや思考力・表現力の高まりにつなげていくために，教材としての価値や内容を十分おさえた上での算数学習を重視した。本時における教材としての価値や考え方・表現のよさを実感できるように，児童の実態や学習内容に応じて，最も適した学習形態を検討するとともに，学習課題から算数的活動，まとめ，適用問題，感想まで，ねらいがすべて一貫している授業展開にすることを大切にした。本時の学習では，どのように考え，どのように表現させたいのかを教材研究によって明らかにし，本時で目指す児童の具体的な姿を事前に設定して，一つひとつの授業をつくり上げるようにした。

② 思考・表現を引き出す発問

〔３つの発問〕

・課題を導く発問

本時のめあてをつかみ，自力解決への見通しをもつ。

・根拠を追究する発問

自力解決における考えの根拠を振り返り，思考を深める。

・算数をつくり出す発問

考え方のよさに着目し，新たな学びを生かすことのよさを実感する。

45分の授業において，児童が主体的に考え表現し続けていくためには，４段階の学習過程（つかむ・考えをもつ・深める・生かす）をつなぐ教師の発問が大きな役割を果たすと考えた。また，教師の発問の積み重ねが，少しずつ子ども自身の問いになっていくことを意図して，発問を具体化した。

③　思考力・表現力を育てるための活動

〔３つの活動〕

・自分と対話する活動（自分と自分）

既習事項を想起して思考を進め，解決する。算数的な表現を用いて思考過程を表現する。自分の思考過程を振り返り，よりよい解決方法を見付ける。

・友達と伝え合う活動（自分と友達）

２人組で，自分の考え方（事実・方法･理由など)を筋道立てて説明し，自分の考え方を明らかにする。その際，相手意識をもって簡潔な表現で説明する。

３，４人のグループで，自分の考え方を具体物の操作，言葉，式，図などを相互に関連付けながら説明し，お互いの考え方を確かめたり，修正したり，表現を比べたりする。全体の場では自信がないために発表しにくい児童も，友達のサポートを受けながら自分の考え方を表現する。

・全体で話し合う活動

（自分と友達と先生）

学級全体で，それぞれの考え方を読み取り，代理説明やリレー説明などによって考え方を共有したり，根拠を追究したりしながら，考え方の確認や補強をする。さらに，考え方を他の表現方法で置き換える，キーワード化するなどして，それぞれの特徴やよさを比べたり，考え方を統合したり，一般化したりしながら，よりよい考え方を見付け，つくり出す。

考えることは一人でもできるが，人とのかかわりを通して，考え表現し合う活動を行えば，より考えを深めたり，広げたりすることができる。学習のねらいや児童の実態に応じて，効果的な人とのかかわり方（①自分と自分②自分と友達③自分と友達と先生）を学習過程に位置付け，３つの活動が互いに補完し合いながら，自問自答する力，自分で見通しをもち筋道立てて考え表現する力を育てるようにした。

(4) 具体的な取組

①　１年「ふえたり　へったり」

ア　ねらいとする思考・表現

「言葉と半具体物と式をつなげて考えたり，友達に説明したりしている。」

イ　課題を導く発問

「絵を見て，ねこのお話をつくってみましょう。」

ウ　ねらいとする学び合いの観点

「式を見て，お話をつくってみましょう。となりのお友達は，お話を聞きながらブロックを動かしてみましょう。」

（具体的な場面⇔式⇔操作 の関連付け）

エ　根拠を追究する発問

「どの式がお話に合っているでしょうか。それは，どうしてですか。」

オ　算数をつくり出す発問

「たし算やひき算がまざっているときでも，１つの式にしてよいのでしょうか。」

カ　ねらいとする感想

「たすとひくがまざっていても，１つの式にできることが分かりました。」

「１つの式からたくさんのお話ができました。」

②　３年「かけ算のしかたを考えよう」

ア　ねらいとする思考・表現

「既習を生かして，３口のかけ算のしかたを考えている。」

イ　課題を導く発問

「問題場面（３つの数のかけ算の場面）を図に表してみましょう。」

ウ　根拠を追究する発問

「どうして，そのような式に表せるのでしょうか。」

エ　算数をつくり出す発問

「どこから計算しても，答えは同じになるのでしょうか。」

オ　ねらいとする学び合いの観点

「２つの式から計算しやすいと思ったものを選び，その理由を伝えましょう。」

（理由やよさの説明）

カ　ねらいとする感想

「３つの数のかけ算は，１つの式に表せることが分かった。」

「どこから計算しても答えは同じなので，計算しやすい方法を見付けたい。」

③　５年「図形の角のひみつを調べよう」

ア　ねらいとする思考・表現

「言葉や式，図を関連付け，根拠や手順などを示しながら，友達に分かりやすく正多角形のかき方を説明している。」

イ　課題を導く発問

「円の内側にぴったり入るように正八角形をかきましょう。」

ウ　根拠を追究する発問

「正八角形や円のどんな性質を利用して作図したのでしょうか。」

エ　算数をつくり出す発問

「他の正多角形も同じように作図できるのでしょうか。」

オ　ねらいとする学び合いの観点

「どうして，その計算をしたのか（円の中心のまわりを等分したのか）を聞きましょう。」　（手順や根拠の説明）

カ　ねらいとする感想

「円の中心のまわりを等分すると，正三角形や正五角形なども簡単にかけた。」

「家でも，他の正多角形をかいてみたい。」

(5) 考察及び成果と課題

① 算数科において思考力・表現力を育てるとき，話し方や聞き方の指導にならないように留意した。考えを算数的に表現できるように，図的表現，記号的表現，操作的表現,簡潔な言葉などを用いて説明する活動,さらには，それらの表現を関連付けながら説明する活動を重視して取り組むようにしたい。また，伝え合う活動，話し合う活動があればいいのではない。考えを表現させればいいのではない。授業のねらいを明確にし，発問と活動を一体化させた授業づくりを大切にしたい。

② 児童自らが問題の条件を整理し，解決の見通しをもとうとする態度の育成につながるように,「課題を導く発問」は段階的に減らしていく。「根拠を追究する発問」の積み重ねにより,「もとにした既習は何か？」「どうして？」という視点で考える態度を育てるようにしていく。

③ よりよい考え方を見付け，算数をつくり出していく活動を充実させるために，全体での話し合いの構想を図に表現しておくなどして，話し合いを仕組むための手立てをさらに工夫していきたい。

3　研究の成果と課題

〔成果〕

○ねらいを明確にした授業展開

・導入から適用・感想までのねらいの一貫性

○「３つのねらい・３つの発問・３つの活動」を一体化させた授業展開

○具体的な児童の変容

・既習事項を想起して考えている

・思考の過程を表現している

・簡潔な表現を用いたり，順序立てた説明をしたりしている

・具体物，図，式を関連付けている

・２つ以上の考え方を比べている

・適用問題を通して，新たに学んだ算数のよさを実感している

〔課題〕

●表現しただけで終わることなく，よりよい考え方を見付け，新たな学びをつくり出していこうとする児童を育てること

●本時のまとめをした後に，児童自らが次の問いをもって考え続けたり,問題の条件を変えたり，新しい問題をつくり出したりすることができるような力を育てること

●学んだことを進んで新たな場面に活用する態度を育てること

以上のような成果と課題を踏まえて，さらに研究を深めていきたい。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

ふりがな	
学校名	かなざわしりつきくがわちょうしょうがっこう 金沢市立菊川町小学校

校 長 名：大杉　繁

所 在 地：石川県金沢市菊川1丁目２番15号

電話番号：076-263-4368

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	算数

《研究主題》

「伝え合いと活用のある授業づくり」を通して，一人一人の思考力・判断力・表現力を高めるための指導方法の工夫改善に関する研究

【研究の要点】

（主題設定の理由）

・基礎・基本は理解しているが，自分の考えを表現できない児童が多いことや，活用する力が十分身に付いていないという実態がある。

・「伝え合う」ことで思考力・判断力・表現力を育み，「生かす」場でより確実に高めていきたいと考える。

（研究の重点）

・思考力・判断力・表現力のとらえと基礎・基本の系統性を明確にし，既習を生かして考える。

・子ども同士で伝え合う場を設定する。

・活用する場を設定する。

（取組の概要）

・教師個々が研究授業や授業公開により，授業力向上に努める。

・低・中・高の分科会が全体研授業を年1回ずつ行う。

・月2回の低・中・高別分科会により，共通理解を図る。

・研究の内容について，学習部会を中心に発信する。

（成果）

・指導案の中に思考力・判断力・表現力の系統，基礎・基本の系統を位置付けることで，その単元や本時で付けたい数学的な考え方を明確にすることができた。

・どのようなノートを書かせればよいか，どのようなことを伝え合えればよいかがはっきりしてきた。

・課題に対して見通しをもち，自分の考えをノートに書ける児童が増えた。

・「確かめる」として習熟問題，「生かす」として活用問題に取り組ませることで，基礎・基本の習得と思考力・判断力・表現力を高めることができた。

・授業の中で児童が導入の課題提示から終末のまとめ，活用問題に取り組むまでの学習の流れを意識するなど学び方が身に付きつつある。

（課題）

・児童同士で考えをつなげたり，深めたりすることで「伝える」から「伝え合い」にしていく必要がある。

・算数用語を系統立てて指導し，児童の表現する力をより高める。

・45分の中に「伝え合い」と「活用」が入れられるように，本時のねらいに応じて何を優先させかを計画する。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

金沢市の中心に位置し，学校の側には石川県の代表的な河川である犀川が流れる。

今年度開校97周年を迎える歴史ある学校で，何代にもわたって住み続ける人が多い地域である。そのため学校教育に対する保護者の期待は大きく，PTA 活動も盛んである。

昨年度から「伝え合い」を中心に研究に取

り組んできたが，聞き方が身に付いている児童が多いものの，学年があがるにつれて話すこと自体消極的になる傾向が見られる。

2　学校の概要（平成22年4月5日現在）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援学級	計
学級数	2	2	1	2	2	2	2	13
児童数	36	40	31	41	60	43	5	256

教員数　20名

Ⅱ　研究の内容及び成果等

1　研究主題等

(1) 研究主題

「伝え合いと活用のある授業づくり」を通して，一人一人の思考力・判断力・表現力を高めるための指導方法の工夫改善に関する研究

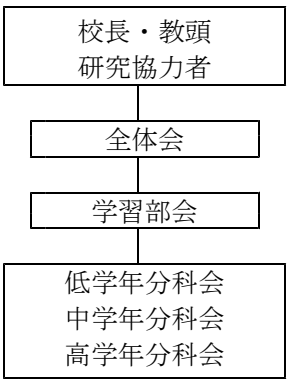
(2) 研究主題設定の理由

基礎・基本は理解しているが，それを生かせなかったり自分の考えを表現できなかったりする児童が多い。また，聞き合いで磨いた思考力・判断力・表現力をより高めることが課題である。

そこで，新学習指導要領の趣旨をもう一度とらえ直し，全学年で一斉に指導方法の改善に取り組むことで，児童の思考力・判断力・表現力をより高めたいと考える。研究テーマも昨年から聞き合いから伝え合いと表現者にもスポットを当てて「伝え合いと活用のある授業」とし，自分の考えを伝え合うことで思考力・判断力・表現力を育み，生かす場でより確実に高めていきたいと考え，主題を設定した。

(3) 取組体制

①　研究組織



②　研究授業

・教師個々が年間２回の研究授業と定期的な授業公開を行い，授業力向上に努める。

・校内で全体研授業を行う。低・中・高の分科会が１回ずつ担当する。

③　校内研修会

・低・中・高別分科会を月２回とり，共通理解を図りながら学校研究を進める。

・研究の内容について随時発信していく。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	4月	全体会（学校研究の方向性と取組の提起）
	5月	全体研授業（5年）
	6月	分科研授業（2年）
	7月	全体研授業（3年），分科研授業（6年）
	8月	全体会（学校研究の中間ふり返り，後期に向けて取組の見直しと共通理解）
	9月	全体研授業（1年）
	10月	全体研授業（4年），分科研授業（3年）
	11月	分科研授業（3年）
	12月	公開研究会
	1月	全体会（21年度の研究の反省，22年度に向けての方向付け）
		分科研授業（5年）
	2月	分科研授業（5年）
		全体研（後期の取組の成果と課題，21年度の学校研究のまとめ）
	3月	全体研（22年度の研究計画・研究体制）

平成22年度	4月	全体会（学校研究についての共通理解と具体案の作成）
	5月	全体研授業（5年），分科研授業（5年）
	6月	分科研授業（3年，2年）
	7月	全体研授業（1年） 分科研授業（3年，4年，1年）
	8月	全体会（学校研究の中間ふり返り） 前期紀要の製本・印刷
	9月	全体会（前期の反省，後期に向けて取組の見直しと共通理解） 分科研授業（1年）
	10月	公開研究会，分科研授業（5年）
	12月	全体研授業（4年）
	1月	全体会（22年度の学校研究の反省，23年度に向けての方向付け）
	2･3月	全体会（後期の取組の成果と課題，学校研究のまとめ） 後期紀要の製本・印刷

2　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 既習事項の活用

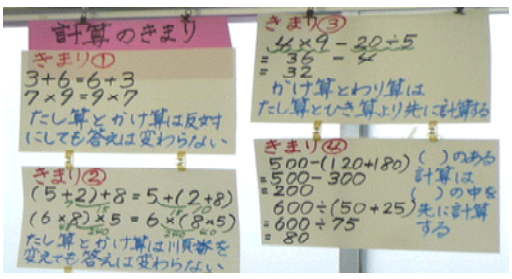
①　研究の重点

思考力・判断力・表現力のとらえと基礎・基本の系統性を明確にし，既習を生かして考える。

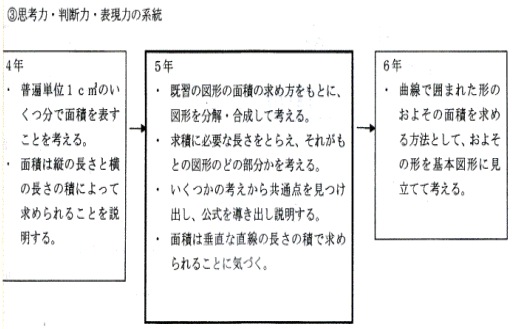
②　具体的な取組

自分の考えをもつために，前時までに学習したことを生かして考えることが大切である。本校では，これを既習事項の活用（活用A）ととらえる。

例えば，前時までの学習と本時の学習の違いは何かを明らかにしたり，教室掲示等で学習の土台をそろえたりして，見通しをもたせることを大切にした。



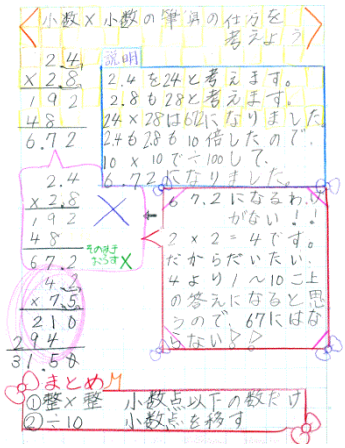
これらの取組において大切なことは，本単元に至るまでの思考力・判断力・表現力の系統や基礎・基本の系統を指導者が把握し，その単元や本時で付けたい数学的な考え方を明確にしておくことである。



③　考察及び成果と課題

指導案の中にも思考力・判断力・表現力の系統，基礎・基本の系統を位置付けたことで，その単元や本時における数学的な考え方がより明確となった。特に意識したことは，「学習のねらい」「学習課題」「その時間の学習のまとめ」を一体化させることであった。そうすることで，教材研究の視点もよりはっきりとした。

また，児童が課題に対して見通しをもてるようになり，自分の考えをノートに表現できる児童が増えた。児童を対象としたアンケートでも，ノートを書けるようになったと実感している児童の割合が昨年度より高くなった。



課題として，子どもたちが既習を意識しながら本時の課題をつかむまでをいかにコンパクトにできるかということである。

(2) 伝え合う場の設定

① 研究の重点

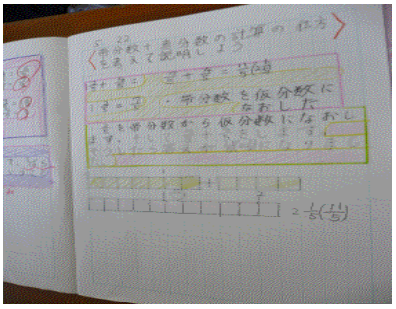
子ども同士で伝え合う場を設定する。

② 具体的な取組

筋道立てて，考え表現する場を意図的に設定した。児童は自力解決の場面で式と図や言葉などを対応させながら筋道立てて考える。その考えを別の児童が図と式を対応させながら考えることを重視した。

例えば，３年生のさくらんぼ計算の図から，それを全員で式化することで考えをより深めることができた。伝え合う方法の工夫として，指示語で説明する児童に，その言葉が何を表すのか算数用語を用いて説明させるようにした。また，児童の実態に応じて図や表をワークシートなどを用いて段階的に指導してきた。

ノート指導においては，高学年ではノートを見開きで使用し，左側には自力解決したもの，右側には友だちの考えでよいと思うものを書くようにした。授業では，ノートを交換して見合うことで児童が上手なノートのかき方のイメージをもてるようにしたり，職員でよいノート指導の例の共通理解を図ったりした。



③ 考察及び成果と課題

その時間にどんなねらいで伝え合うのか，そのためにどのような手立てをとるのか，どのような算数用語を用いて説明できるようにすればよいのかを明らかにした。

また，考え方を比較検討しやすいように板書の構造化をはかった。例えば，考え方にキーワードを付けることは，相違点や共通点を考えるために有効であった。

考えを伝えることはできるが，単発発言で終わってしまうことが多く，考えがつながるという場面が少なかった。そこで，発表された考えを他の児童が説明する場を取り入れた結果，伝え合いが広まり，理解の深まりも見られた。

今後は，自力解決後にノートを交換し合う場を設定することで，新たな考えをもたせたり，自分の考えを深めたりさせたい。さらに，ペアやグループなど学習形態の工夫により伝え合う機会をより多くし，学習に深まりをもたせたい。

(3) 活用する場の設定

① 研究の重点

活用する場を設定する。

② 具体的な取組

本校の授業のサイクルは，⑴課題をつかむ⑵自力解決をする⑶考えを伝え合う⑷まとめる⑸生かす，である。⑸の場において，基礎・基本の習得を図る習熟問題，本時で学習したことをより確実にする適

用問題，より思考力・判断力・表現力を高める活用問題のいずれかに取り組む。本校では，本時の学習の活用（活用 B）を特に重点として取り組んできた。活用問題も算数科固有の問題だけでなく，他の教科に関連した問題，日常生活と関連した問題などを設定した。例えば，２年生の「100 より大きい数」の単元で，身近な買い物の場面を設定し，100 円で品物が買えるかどうかを考えると児童の意欲がより高まった。

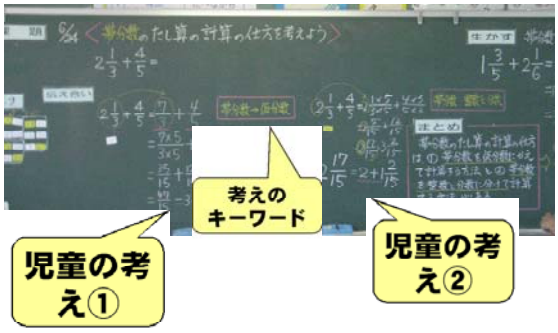
③　考察及び成果と課題

基礎・基本の習得と思考力・判断力・表現力を高めることの両立を図るために，ねらいに応じて「確かめる」として習熟問題に取り組ませたり，「生かす」として活用問題に取り組ませたりした。その結果，基礎・基本の習得と思考力・判断力・表現力を高めることの両方に一定の成果を得ることができた。

活用問題を設定する上では，何をねらいとするのかが大切である。本時のねらいのどの力を高めたいかを考えなければならない。また，条件を変更したり数範囲を広げたりするなど視点を変更する目を育て，主体的に問題に取り組めるような児童に育てることが今後の課題である。

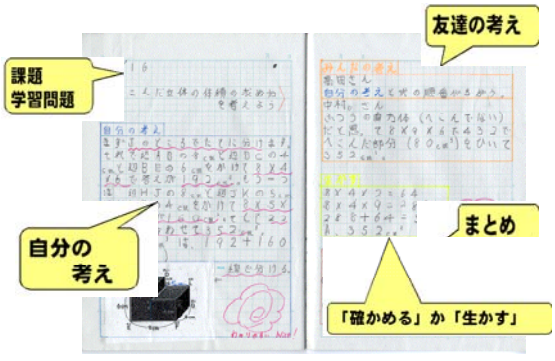
３　研究の成果と課題

図と式を結び付けたり，式の意味を問うたりする指導を意識し，考えの根拠をはっきりさせるようにしてきた。その結果，自力解決の場面でどのようなノートを書かせればよいのかが少しずつはっきりしてきた。伝え合いの場面では考えをキーワード化し，考え方の相違点が見えるようにすることで，どのようなことを伝え合えばよいのかが明確となり「伝え合い」が「深め合い」となっていった。



こうした取組を通して全学年で，自分の考えをはっきりさせたり，他の児童にわかりやすく説明したりすることを意識させた結果，学習の深まりが見られるようになった。

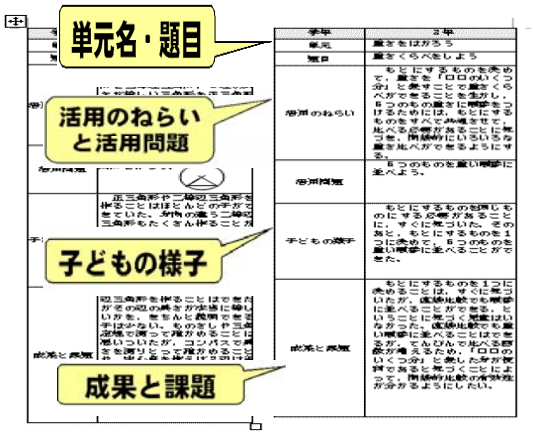
ノートについては，多くの児童が自分の考えをノートに書けるようになり，それを児童自身も実感していることが一番大きな変容である。22 年度７月に実施した児童対象のアンケートの結果では，ノートを書けるようになったと感じている児童が全校で 88 %であった。特に高学年では，前時の友だちの考えを使って解決する児童も見られるようになってきた。これは，職員が共通理解してノート指導を行ってきたことや，児童がどのようなノートを書くとよいかをつかんできたからであると思われる。



【ノートに考えが書けると答えた児童の割合】

１年	２年	３年	４年	５年	６年
80 %	88 %	88 %	90 %	95 %	83 %

活用する場では，児童にとって身近な日常生活に関連する問題を設定したり，本時で学習したことを使って解決できたという満足感を味わわせたりすることで児童の意欲が高まることが明らかとなった。必ずしも難易度を高めた問題を設定する必要はなく，21 年度の課題であった「活用のねらいを明確にする」ことで児童に即した活用問題を設定しやすくなった。



課題として，「伝え合い」ではなく「伝える」で終わることが多く，児童同士で考えをつなげたり，深めたりすることができるようにしていくことがあげられる。算数用語を使って説明することで，考えが正確に伝わり，話し合いもスムーズになることが分かった。

しかし，それらを用いた表現が弱いという実態があるので，算数用語を系統立てて指導し，児童の表現する力をより高めていきたい。

また，「伝え合い」と「活用」を 45 分の授業に入れるためには，本時のねらいに応じて何を優先させるかを計画し，時間のバランスを適切にとることが必要である。